

2014年2月17日 全14頁

# 中国語表現から見る現代中国3つの顔

常務理事 金森俊樹

## [要約]

- 長期間にわたって高成長を続け、GDP規模では世界第二位となった中国だが、一人当たりGDPではなお先進国には遠く及ばない。また所得格差が拡大し環境汚染が深刻化する等、高成長に伴って深刻な社会問題も種々発生してきており、それが人々の意識にも大きな変化をもたらしている。本稿は、こうした状況下で、中国政府および一般の人々が見せる様々な側面を、ネット上や種々の報道・論文等で見られる中国語表現を通して実感しようとする試みである。

(\*) 中国本土では現在簡体文字が使用されているが、本稿では、できる限り対応する日本語漢字を使用、また鍵となる中国語表現を太字で表記し、適宜解説を加えている。本稿の中国語表現の一部については、香港中文大学典拠中国語文研修所の韓彤宇氏、韓晨宇氏から貴重な助言を得ているが、ありうる誤りはすべて筆者の責任である。

(\*) 本稿は、外国為替貿易研究会発行「国際金融」2014年2月号に掲載されたレポートを、加筆修正したものである。

## 1. 政治大国としての中国

### (1) 台頭する大国論、グローバル・ガバナンスへの関心

世界第二位の経済大国になった今、国際社会で様々な事項を議論し、方針を決める枠組みはどうあるべきかという**全球治理**（グローバル・ガバナンス）問題に対して、近年、中国は強い関心を持つようになってきている。そして、そうした問題意識が中国内で高まっていることを対外的に示すことにも熱心であり、2011-12年、筆者が参加したものだけでも、中国社会科学院主催‘**亜洲研究論壇**’での‘**亜洲発展と全球治理**’、中国国際経済交流中心（CCIEE）が主催した‘**全球智庫峰会（グローバル・シンクタンク・サミット）**’における‘**全球経済治理：共同責任**’（何れも2011年6月、北京）、さらにCCIEEと国連開発計画（UNDP）中国事務所が共催した‘**全球治理、前進か後退か？—途上国の視角**’と題した‘**全球治理高層（ハイレベル）政**

策論壇’（2012年12月、北京）といった国際会議が開かれており、アジアのみならず、欧米各国から経済や国際政治の専門家を招いて議論をしている。

中国の学界では、特に2012年11月の共産党大会での指導層交替と軌を一にするようにして、いわゆる**大国関係論**が多く見られるようになった。例えば‘大国のアジア戦略調整と中国の対応’（亜太藍皮書2012年）、‘安定的な体系下での新しい大国関係’（毛沢東鄧小平理論研究、同年10月）、‘大国外交は**軟硬兼施**（ハードラインとソフトラインを兼ねた政策）が必要’（人民論壇、同年11月）、‘中国外交が硬政策と軟政策を使い分ける基準’（人民論壇、2013年3月）、‘新型大国関係の構築’（人民日報理論、同年4月）、‘積極的な姿勢で大国関係を構築すべき’（中国社会科学報、同年9月）等である。これら論文は一樣に、大国関係の特徴を示すキーワードとして、冷戦前は**零和博奔**（‘博奔’はゲーム、ゼロサム・ゲーム）、冷戦中は分裂、緊張、抑圧、対抗衝突、敵我分明（誰が敵か味方かはっきりしている）、冷戦後は複雑・多様化、競争と**合作**（協力）の併存、**亦敵亦友**（‘亦’は‘、、、も’の意、敵でもあり友でもある）といった表現で特徴付けられるとし、‘大国外交、、、’、‘中国外交、、、’では、行き過ぎた硬政策も軟政策も控え、その合理的な使い分け、**剛柔相濟**（硬軟取り混ぜる事）が大国外交として望ましく、**堅定政策**（確固・き然とした政策）が自国の利益に資する一方、**温和政策**が他国との協力空間を広げることになると論じている。一部論文は、現在、大国関係とは中米関係に他ならないと明確に主張しており、中国政府自体も、2013年6月の米中首脳会談で、盛んに「対抗ではない新しい大国関係の構築」について米側に言及した模様で、習主席が大国関係とは中国と米国との関係のことだという意識を強く打ち出していることは明らかだ。この点は、胡前国家主席が、2012年11月の党大会で、共産党総書記としては最後の演説の中で、「大国関係とは全ての先進国との関係」と述べたことと対照的と言うべきだろう。

自らの大国意識の高まりと同時に、中国は国際社会の中で**中国責任論**が高まっていることも気にかけている。正確に言えば、時系列的には、GDP規模で日本を抜く前後の2007-10年頃にまず責任論が注目され、その後次第に大国論が出てくるようになった。中国責任論に対する中国の認識の特徴は、責任論を**中国威脅**（脅威）論と**中国崩潰**（崩壊）論が結合し変化したものと見ていることだ。そしてそこで問題とされる領域は、中国経済の構造的な問題から地球環境や資源への影響、安全保障面等に拡大し続けており、中国が大国に発展する歴史的過程の中で必然的に責任論が大きくなっていると捉えている。しかしその原因は複雑多岐にわたり、特に以下の4つの矛盾が何れもすぐには解消しないことから、責任論は長期的に存在し続けることになる見ている。

- ① GDP総額では世界第二位だが、一人当たり所得や国際競争力はなお低いという中国経済の矛盾
- ② 中国の国際社会での地位が急速に向上しているのに対し、全球治理能力の改善・向上のスピードは遅いという矛盾
- ③ 中国が関与する全球治理の範囲は広範だが、中国が提供する国際公共財はなお少ないという矛盾
- ④ 中国は**国際体系異類**、国際社会のこれまでの体系の中では異なった類型として、世界の

国の仲間入りをしたという矛盾

## (2) G20 に対する積極評価

G20 サミットは、周知のように、日本、カナダ、フランス、ドイツ、イタリア、英国、米国の G7 に、中国、ロシア、インド、ブラジル等を加えた 20 カ国・地域による国際的枠組みである。1999 年から年 1 回開催されていたが、グローバル金融危機を受け、2009 年以降開催頻度が増え、その重要性が増している。中国は元来、IMF や世銀、G7 といった国際組織あるいは国際的枠組みに対し、欧米先進国主導で「民主的でない」との意識を強く有してきた。国際金融の面では、中国内にも、伝統的な枠組みは、問題はあるにしてもそれなりに有効に機能してきており、G20 が近い将来、これらに完全に代替するといった過大な期待は持つべきでないとの見方が有力であり、そうであるからこそ、IMF や世銀に対する出資を増額し、これら既存組織での自らの発言権拡大を目指しているが、同時に、自らがより国際的影響力を発揮できる枠組みを模索する中で、G20 への関心は高く、その役割を積極的に評価する傾向は強い。

中国の G20 に対する積極的評価は、主として以下に起因する。

- ① **合法性と有効性のバランス**。すなわち、一部先進国が主導する枠組みでなく、文化的、地理的に多様なより多くの新興国や途上国が平等なステータスで参加していることから、**包容性、開放性、民主制**を備えている。しかし同時に、国連のようにそうした合法性を追求するあまり、意思決定が遅くなる等、有効性を犠牲にしているということもない。
- ② 二国間の争議の**多辺（マルチ）化**。（中国の見解では）様々な交渉で、米国等と二国間で行った場合に中国が競争上弱い立場になることを、多国間枠組みにもっていくことによって回避できる（ただしこの点は、事柄によっては、中国の方針は逆のようにも見える）。

好意的に見れば、中国として、どうすれば大国としての国際的責任を果たすことができるのかという問題認識が強くなっていると言えようが、各国、とりわけ他の新興国や途上国を味方に付けつつ、国際社会でどうすれば影響力を高め、自らの利益を守ることができるかという戦略を考えていることは明らかである。これは長く、中国の外交政策を特徴付けてきた**韬光養晦**政策（能力を隠して目立たないようにすること。貧困問題を抱える途上国としては、外交より国内政策に専念すべきとの方針）の転換とも受け止められる。

## (3) 援助大国としての中国

資源確保との関係で、近年、中国の途上国への援助が注目されているが、実は、中国は建国以来、世銀等に代表される国際的な枠組みの外で、外交政策の一環として、独自に対外援助を行ってきた。2011 年 4 月に初めて、中国國務院弁公室は**対外援助白皮書**を発表した。それによると、2004-09 年の間、対外援助額は年平均 29.4%の伸びで増加、2009 年末時点で、中国が途

上国に供与した援助累計額は 2,563 億元（当時のレートで約 3.2 兆円）、うちアフリカ向けが最も多く約 45%、次いでアジア向けが 30%強とされている。白書が援助の基本方針として掲げているのは、以下の 5 点である。特に②、③が重要で、援助を供与する際に当該途上国の経済政策に注文を付け、またその政治的ガバナンスも考慮する機会が多い先進国や国際援助機関の援助と一線を画している。

- ① **自主発展能力**、すなわち被援助国自身の発展能力を高めること
- ② いかなる政治的条件も付けず、被援助国自ら発展方式を選ぶ権利を尊重、すなわち援助を被援助国に対する**内政干渉**、**政治特権**の手段としないこと
- ③ **双赢**、**共赢**（‘赢’は‘勝つ’の意。ウィンウィン）、**平等互利**、**共同发展**
- ④ **量力而行**、**尽力而为**（中国自身の援助能力の範囲で、できる限りの援助）
- ⑤ **与时俱進**、**改革创新**（‘与时俱進’は時とともに進む。援助のあり方や管理を内外情勢に応じ改革・イノベーションを図る）

#### (4) 地域協力の枠組みを主導する大国

国際社会の中で大国として影響力を行使しようとする中国だが、その典型を**上海合作組織**、**上合組**（上海協力機構、SCO）と呼ばれている地域協力枠組みに見ることができる。上合組は、周知の通り、中国、ロシア、カザフスタン、キルギスタン、タジキスタン、ウズベキスタンの 6 カ国による地域安全保障・経済協力を目的とした地域協力の枠組みである。1996 年、ウズベキスタンを除く 5 カ国が上海ファイブとして会合を開いたのが始まりで、その後 2001 年にウズベキスタンが加盟し、上合組として正式発足した。1990 年代頃から中国は、APEC、アセアン地域フォーラム（ARF）等、地域安全保障を主たる目的とする様々な多国間地域協力の枠組みに積極的に参画するようになってきており、上合組もそのひとつであるが、中国として上合組を最も積極的に制度化し、その中で主導的役割を果たそうとしていることは明らかだ。中国にとって、増大するエネルギー需要を満たすため、不安定な中東地域への過度の依存を避ける観点から、中央アジアはエネルギー供給先として戦略的にきわめて重要となっており、上合組がそのための地域協力の基礎を提供している。中国は、中央アジア諸国のエネルギー分野への投資・援助を積極的に行ってきたおり、2013 年 9 月、習主席が中央アジア 4 カ国を訪問した際にも、多くのエネルギー供給に関する合意が結ばれたと伝えられている。

中国が上合組を主導することによって、上合組のもうひとつの主要メンバーであるロシアとの関係は微妙になっている。これまでのところ中国は、中央アジアに対する経済的関心は強めているものの、なお政治・軍事面で影響力を強化するまでには踏み込んでいないため、ロシアは、中国が上合組を通じて中央アジアへの影響力を増大させていることを、言わば黙認している。しかし同時に、制度化された地域協力枠組みとして、中国が主導する形で上合組の国際的プレゼンスが大きくなっていることに対し、次第にロシアのフラストレーションが高まっている。もとよりロシアは、アジア地域の急速な発展に伴い、**戦略東進**（欧州から東に戦略の重点

を移す戦略)を採っており、ロシアにとって**老大難**(以前からある非常に難しい問題)であるシベリア開発をどう進めるか、そこで中国等アジア諸国の協力をどう取り込むかに関心が高まっている。他方で、資源依存型の経済から脱却しようとするロシア内では、中国にエネルギー・鉱物資源等一次産品を一方向的に輸出することで、シベリア極東は中国の**能源植民地**(エネルギー植民地)との声、**経済付属論**(ロシアは中国の経済属国)、**吃亏論**(‘吃’は食べる、‘亏’は損、ロシアが損をしている)が強くなっており、**助美制華**(‘美’は米国、米国を助け中国を抑える)といった議論まである。中国の学者からも、ロシアのこうした対中警戒論台頭を認識し、それも踏まえながら、ロシアとの関係を考えていく必要があるという指摘が出始めている。

## 2. 巨大新興・途上国としての中国

### (1) なお援助を受ける中国

上述のように、中国はすでに援助大国となっているが、その一方で、国際援助機関からなお途上国として開発援助を受けている。世銀からの新規融資額は、2011年17.4億ドル、12年12.6億ドル、ADBからは各々14.4億ドル、18.1億ドルである。世界第二位の経済規模で、3兆6,600億ドル(2013年9月現在)にのぼる世界最大の外貨準備を有する国が、他の途上国への援助を増やしつつ、他方でなお援助を受ける側にもあるというのは、常識的には奇妙なことだ。中国にとって、上記の国際援助機関から受けている融資は、中国にとって経済的にはほとんど意味はなく、援助機関の援助から「卒業」しても、資金面では何の影響もないだろう。また援助を受けていると、援助機関から政策面での対話(policy dialogue)を要求されることにもなり、中国からしてみれば厄介でもあろう。それにもかかわらず、援助を受け続けている大きな理由のひとつは、**発展中国家**(発展途上国)としてのステータスを維持しつつ、様々な局面で巧みに「大国」と「途上国」の顔を使い分けることにある。国際援助機関から援助を受けることは、なお途上国であることを国際的に認知させるための有効な手段であり、また国際援助機関の中で、言わば途上国のリーダーとしての役割を担い、数で言えば世界でなお圧倒的に多い途上国を味方につけ、それが他の様々な局面で役に立つという読みがある。援助機関の側からしても、各機関の「卒業政策(graduation policy)」で援助適格基準とされる一人当たりGDPなどの客観的指標が満たされていれば、簡単に「卒業」させるわけにはいかず、周知の通り、中国は一人当たりGDPではなお低水準だ。また援助機関や援助資金を提供する先進国(ドナー国)にしても、援助を続けていることにより、最低限、内政干渉に敏感な中国にも、経済政策面での対話をするきっかけになる。

### (2) 地球温暖化防止交渉と中国

「発展中国家」としての中国が現れる端的なケースは、地球温暖化交渉だ。国際エネルギー機関(IEA)等の資料によると、中国の温室効果ガス排出量は世界最大、世界全体の排出量の約4分の1を占めている。国務院新聞弁公室は毎年、**应对气候变化的政策与行动白皮书**、いわゆる

気候変動白書を発表している。その基本的ねらいは、中国が国内的・国際的に地球温暖化に対してどのような対策を採っているかを紹介・宣伝することにあるが、京都議定書後の国際的枠組みを議論することで注目された COP17（2011年12月、於：ダーバン、南アフリカ）開催直前に発表された同年11月の白書では、COP17が国際交渉上節目となる重要な会議ということもあって、国際交渉にあたっての中国としての4つの原則的立場がとりわけ明確に示されている。これらはおそらく、1992年のリオの地球環境サミットから中国（および他の多くの途上国）が主張し続けていることで、特に目新しさはないが、先進国の歴史的責任を強調し、成長にも配慮すべき等としている点で、本問題において、途上国の立場をとる中国の姿勢が端的に表れている。2013年等、他の年の白書でも、これほど明確な形ではないものの、同趣旨のことが述べられている。

- ① **共同有区別責任原則**（共通だが差異のある責任、温暖化の責任は先進国にあり、先進国は温室効果ガスを率先して削減する歴史的責任がある）
- ② **持続発展原則**（持続可能な経済発展、貧困解消等を進めるため経済成長も重要）
- ③ 先進国は途上国に資金・技術面での支援を強化すること
- ④ 国連の枠組みで**協商一致**（コンセンサス）原則に基づく交渉であること

### (3) 地域連携交渉と中国

途上国としての顔は、FTA や EPA といった多国間経済連携の枠組みを進める中でも垣間見られる。例えば中国は、環太平洋経済連携協定（TPP）を、米国が戦略上重視する地域を中東からアジアに移す**重返政策**（戻ってきたアジア戦略）と位置付けて警戒する一方で、中国自身がこうした地域経済連携に臨む際の原則として、**開放性**（参加する意思のある経済体すべてに開かれていること）、**実質性**（実質的な自由化基準を具備していること）、**平等性**（交渉ステータスが平等で、連携によって相互に利益を享受できること）といった一般的によく言われる原則に加え、**漸進性**（交渉分野の範囲や自由化の程度は、段階的に拡大・深化させるべき）と、**包容性**（異なる経済体の個々の事情・特殊性に配慮、特に発展段階の低い経済体や小国に配慮し、柔軟な対応をとること）を強調している。これらは実は、上記 G20 への評価基準にもつながるものでもある。

中国は基本的には TPP を米国のアジア戦略として警戒しているが、中国内の雰囲気は微妙に揺れ動いている。第一に、以前は、中国の参加しない TPP にアジア諸国を引き付ける力はなく、**無疾而終**（病気が無くても死に至る、いずれ放っておいても自滅する）との見方が支配的だったが、これに変化が生じている。例えば、欧州の一体化が当初、英国が参加しない形でスタートしたが、結局一体化のメリットを評価して英国等多くの国が参加することになった歴史に着目し、経済大国が参加しないからその地域協力の枠組みが深化しないというわけでは必ずしもなく、TPP も中国が参加するしないにかかわらず、参加国の交渉の駆け引きの結果として存在し発展していくことを強調する立場である。これは参加国の規模が次第に大きくなるとともに、

交渉がそれなりに進んでいる状況を目の当たりにしているという事情がある。第二に、上記のような大国関係論を理論的基礎にして、TPPは米国のアジア戦略であるので中国はこれに組み入るべきでないといった単純な議論は、冷戦時代の古い発想だとの指摘が出始めている。より重要なことは、中国経済自体との関係だ。高齢化や環境汚染が深刻化する中で中国経済は転換期を迎えており、労働力と資本の投入増によって粗放的な成長を遂げる時代は終わりつつある。これは、2013年11月の三中全会を見ても明らかのように、中国内でもほぼ共通の認識になっており、今後より質の高い持続的成長に移行するためには、様々な市場化措置や国有企業の改革などを推進することが必要という点についても、総論では異論は見られない。問題は、中国ではこれら改革が様々な既得権益に衝突してなかなか進まないことだ。中国はTPPについて、これまで、環境規定や労働規約、あるいは国有企業の扱い等の面で、要求されている自由化の程度が高すぎ、それがまさに中国を意図的に排除しようとするものだと批判してきた。個々の国の発展段階や固有の事情に配慮すべきとの原則は主張しつつも、自らの経済が転換期を迎えているという認識が強まる状況下、TPPという言葉は‘外圧’を利用して国内の経済改革を進め、転換期を乗り越えようとする‘改革重視派’の戦略も見え隠れしている。

### 3. 悩める経済大国としての中国

#### (1) 腐敗・汚職・格差固定化への怒り

2012年、陝西省で多くの死傷者が出る重大な交通事故が発生した際、現場を訪れた省の**老虎**（高級幹部）の笑い顔がネットで出回り、反感を買った。幹部の腕に**名表**（‘名牌手表’の略、‘名牌’は高級ブランド、‘手表’は腕時計）がはめられているネット上の写真に注目が集まり、その後、同幹部は他にもいくつもの名表を所持していることが暴露され、**表哥**（本来は‘年上のいとこ’の意味だが、名表の‘表’をかけている）が、**贪污**（腐敗・汚職）を象徴する用語となった。低所得者向けに建設される**経適房**（エコノミー住宅）だが、実は高級車を乗り回しているような**開豪车**（‘豪车’は高級車、‘開’は車を運転する）、富裕層の多くがこうした低廉住宅を買い占めるといった新たな不公平が生じている。2013年初、河南省鄭州市の住宅監督局長が自分の小さな娘の名義で11棟を所有、その他の家族名義も含めて計29棟の住宅を所有していたとして、**房奴**（‘房’は住宅の意、住宅の奴隷）ならぬ**房妹**の出現だとメディアで大きく取り上げられた。当事者の形態によって、**房叔**、**房爺**、**房嫂**、**表叔**、等々となる。こうした現象に対し、**大V**（人気があって大きな影響力を持つ**微博**、VはVIPとVerifyから来ている。**微博**の発音はウェイボーでブログ、発音と意味から漢字があてはめられている例）が**大謔**、根拠のないうわさを流し社会を混乱させているとして、国のネット情報管理センターは、特にこうした大Vへの批判・監視を強めている。しかし、表哥や房妹がいずれもネット上で暴露され、役人が失脚してやっとその不公正に社会の焦点があたるという現実があり、**謠言**（うわさ）を防止するためには、まずその定義を明確化し、政府自らが情報の透明性を高め、積極的に情報を公開して自由な情報空間を作ることが重要との指摘が出ている（社会科学網）。房妹の一方で、事実上庶民は家を持っていないという実態がある。金余りにもかかわらず、投資する適当な金

融資産が少ない中で、広範に**炒房**（‘炒’は投機、不動産投機）が行われ、住宅価格は特に都市部で著しく上昇している。北京では現在1平方メートル3万元程度、広さ百平方メートルのアパートで3百万元（日本円で5千万円程度）は下らない。同市給与所得者の平均年収は2010年約5万元、**不吃不喝工作**（‘吃’は食べる、‘喝’は飲む、‘工作’は働く）、飲まず食わずで働いても、購入するのに60年にかかる。

腐敗・汚職は**灰色収入**を伴う。灰色収入の推計を専門にしている中国学者によると、2011年の灰色収入は6.2兆元、GDPの12%に達しており、その多くは高所得者に帰属している。その結果、都市部の所得上位10%の平均収入は下位10%の20.9倍と、公統計の8.6倍の格差を大きく上回る。とりわけ行政部門の無駄使いや役人の公費を使つての私的旅行、公用車の私的目的での使用、公費での飲み食いなどへの庶民の怒りや不満が高まっている。なかでも公用車は、3分の1が本当の公用、3分の1が幹部の私用、残り3分の1が運転手の私用に使われていると評判が悪い。これを受け当局は、中央省庁の公務出張旅費、公用車購入維持費、公務接待費の**三公経費**を、2011年から公開し始めている。2010年95億元から12年は81億元と、表向きは経費が削減されているが、公開数値は定義・範囲が不明確で、庶民から見ると**天書**（天からの書のようにちんぷんかんぷん）、**霧里看花**（ぼやけていて真実が見えない）との評価である。公表数値は、中央分だけとはいえ、様々な専門家の推計に比べて桁違いに小さい。

貧富の格差が固定化しつつあることへの不満も増幅している。中国のシンクタンク社会科学院は、2013年の10大流行語のひとつとして**土豪**（**土氣的富豪**、野暮ったい金持ち）を挙げる。もともとネットゲーム上の教養はないが金持ちで人民元を浪費する登場人物に由来するが、同院の解説によれば、既に社会の階層分化・貧富の拡大、および土豪に対する人々の軽蔑と羨望の入り混じった微妙な感情を表す、社会学・政治学上の用語になりつつある。**富二代**、富裕層・特権階級の子弟が贅沢三昧をするのに対し、**貧二代**、貧しい家庭の子供は貧困から逃れられない。富二代については、中国語サイトに次のような投稿がある。

王震の息子王軍、中国中信集团董事长、会社価値7014億元

王軍の息子王京京、中科環保副主席、会社価値7.7億元

江沢民の息子江綿恒、中国網通創始者、会社価値1666億元

朱鎔基の娘朱燕来、中銀香港發展規画部総経理、会社価値1644億元

胡锦涛の息子胡海峰、威視公司総裁、会社価値838億元

温家宝の息子温雲松、北京Unihub総裁、会社価値433億元

李鵬の息子李小鵬、華能電力董事長、会社価値176億元

李鵬の娘李小琳、中国電力副董事長、会社価値82億元等々



同書き込みは、役所の調査報告では、億万富豪の9割以上は富豪の子弟で、うち2900余の子弟だけで合計2兆元以上の資産を有しており、ある著名な経済学者は「中国のお金は米国、アジア各国、北朝鮮、政府、役人、富二代、**二奶**（愛人）と、一般庶民以外は誰でも使える」としていると続ける。

新指導層も腐敗・汚職の問題に危機感を持っており、**踏石留印、抓鉄有痕**（石を踏んで石の上に足跡を残す、また鉄をつかんで鉄の上に痕跡を残す、徹底的に業務を遂行する）の決意で、**老虎も蒼蠅**（ハエ、一般の公務員）も一網打尽にすると発言している。2012年12月の政治局会議で習国家主席は、会議の効率化、出張の際の送迎・接待の簡素化や同行者の縮小、各種の儀礼的な慣行の禁止、質素節約の励行などを指示し、その意気込みを示した。これらは8項目から成るため**習八条**と呼ばれている。ただネット上では、実際にこの政治局会議を指揮したのは規律担当の王岐山常務委員で、本来は**王八条**と呼ぶべきだという声がある。上記社会科学院の選ぶ2013年10大流行語に**光盤**がある。元来はコンパクトディスクの意味だが、ここでは‘光’すなわち‘、、、だけ’、‘盤’すなわち皿で、全て食べて皿しか残っていないという意味になる。2013年から**光盤行動**が節約、浪費を慎む行動として奨励され始めたことを反映している（レストランで食べ残したものは、**打包**、包んで持ち帰ることを奨励）。習八条発表直後はさすがにやや雰囲気が変わったようだが、ほどなくネット上では、**吃喝一条街**（‘吃’は食べる、‘喝’は飲む、飲み食い、‘一条街’はメインストリート）と呼ばれる高級レストランが立ち並ぶ地域で、1本5-6,000元（約10万円）以上する高級茅台酒をミネラルウォーターのビンに入れ替えるといった偽装、高級レストランの前に停車する際に車のナンバープレートを隠すといった事例、さらには、銀行が自社ビルの上に一般のエレベーターでは行けないプライベート倶楽部を設け、特別の客を接待するといった事例が多く見られ、高級官僚の**吃喝玩樂**（‘玩’は遊ぶ、贅沢三昧）は、まさに**死灰復燃**（死んだように見えていた灰が再び燃え出す）だとの声が挙がっている。2013年5月、党紀律委は紀律問題担当者を対象として全ての会員制カード（いわゆるVIPカード）を返上させるとの方針も出した。庶民からは「一応歓迎できるが、**一陣風**にすぎない」、またビジネス関係者の受け止め方は**淡定**（何か事が起こっても動揺せず冷めている、ネット流行語）で、「カードの秘密性は高く、誰が持っているか調べることはできないはず」といった声が聞かれる。

2013年3月全人代における最高人民検察院工作報告によると、2008-12年、収賄・横領での立件数は約16.6万件、人数で約22万人（うち省長級30人、局長級950人）、2007年までの5年間は約21万人だった。摘発を強化しているとするのか、腐敗・汚職が相変わらず減っていないと見るのか、数字の判断は難しい。本当に**生老虎**の腐敗汚職摘発までいくのか、**死老虎**で終わるのではないのか、特に**裸官**（子女を海外に移住させ、また財産を海外に移転して身軽になっている官僚）の取締まりまでいくのか、なお庶民の疑念は大きい。13年5月、中国メディアは、信頼できる消息筋の話として、共産党中央紀律検査委員会を所管する王岐山常務委員は、全党員に対し、党部長級以上の幹部は、海外に留学させている子女がいる場合、学業終了後1年以内に帰国させること、そうしない場合は本人の降格がありうることを、また対象を2014年に副部長級以上、2015年には正庁級官員以上と拡大することを通告したと伝えている。8月には、

党政治局は「腐敗の予防・取締り体系構築に向けての2013-17年にかけての作業計画」を承認する等、動きはある。他方で、**打老虎**は、水滸伝に出てくるトラに立ち向かう人物を連想させるが、これはもちろん生命に対する大きなリスクを伴うもので、この用語が使用されていることは、とりもなおさず、高級幹部の腐敗・汚職に本気で取り組むことに対する新指導層の不安心理を表すものだとの見方もある。個々人の腐敗・汚職を追求するだけでなく、またそれが単なる権力闘争に終わらないためにも、**権力之籠**（権力をかごに入れる）、権力の集中・乱用が腐敗・汚職の根源にあり、それを防ぐため、権力を適切な法規範の下において管理するような制度を構築することがより重要だとのもっともな声も多い。**老話題**に新指導層がどのように対応していくのか、注目されている。

## (2) 都市化に伴う弊害

**城鎮化**（都市化、一般的に‘城市’が大都市、‘鎮’が地方の中小都市を指す）は、現在中国が進める重点経済政策のひとつだが、都市面積が拡大する**地的城鎮化**だけが進み、**重物軽人**（物を重視し人を軽視する）の傾向が顕著だ。都市に定住していても、実際には農村戸籍のまま都市戸籍住民と同等の公共サービスの提供を受けられない**半城市人**と呼ばれる人々が約2.5億人にのぼるとされており、現在は**浅城鎮化**、**偽城鎮化**が進んでいるにすぎないと言われる。専門家はもとより政府も、まず住民の利益や福祉の向上に着目した**人的城鎮化**、農民工が都市戸籍住民と同じ公共サービスを受けられるようにする**市民化**を通じて、長年続いてきた都市化の制約要因である**城郷二元化**（都市と農村の二極構造）を一体化する**新型城鎮化**が重要だと言いつつ始めているのも、こうした状況を意識してのことだ。以前の人々は、**鐘摆式**（振り子式、都市に出稼ぎに来て定住できない農民工は**鐘摆式移民**と呼ばれてきた）、**候鳥式**（渡り鳥的な、例えば**候鳥式養老**、引退後、季節に合わせてあちこち移動し生活を楽しむという形で使われる）的な就業に耐えたが、現在、農民工の多くは**80後**、**90後**（1980年代、90年代生まれ）の若者で、都市での定住を希望している者が多い。人的城鎮化は**重頭戏**（伝統劇などで使われる。動作が多く、困難かつ重要な作業）で、その核心となるのが1950年代末に導入され、50年以上の歴史を有する都市と農村を分離した戸籍制度の改革だ。人的城鎮化を進める上での**攔路虎**（路をさえぎる虎、障害物、元来は、咳止めや解毒等の効能があるとされる漢方薬、茎が細長い植物で、しばしば道路の通行の障害になる）と言われる所以である。

**摊大餅**（‘丸いケーキを摊、引き伸ばして大きくする’から、元来は、ひとつの中心から放射線上に拡大させていく都市発展方式を意味するが、専門家の間では、**冒進城鎮化**、よく考えず無秩序に都市化を進める発展方式という批判的な意味で使用される）の具体的な弊害も指摘され始めている。第一に、**人為造城**、**有城無業**（人為的に都市を造る結果、都市はできても、そこに産業がない）だ。産業振興や生活インフラ、生態環境の整備などを伴わない**村村点火**、**户户冒煙**（かつては、改革開放による経済成長を賞賛する流行語、今は、粗放的で無計画な旧式の開発形態というマイナスのニュアンスが大きい）は、結局、**空城**、**睡城**、**鬼城**、**黒城**、さらには**死城**と呼ばれる、人々がそこで眠るだけ、あるいは全く住む人がいない都市を造ること

になるだけとの問題意識である。

第二に、第二次世界大戦後の欧米先進国の教訓があるにもかかわらず、中国でも、都市化推進の過程で、**大拆大建**（大規模な破壊と建設）が進められ、多くの歴史的建造物が失われた後に、一様に高層ビル群が建設される結果、どこの都市も同じで個性がないという**千城一面**と呼ばれる現象が生じている。

第三に、冒進城镇化による人口移動によって、**空巢老人・留守老人**（高齢化が進む中で若者が出稼ぎに行く結果、急速に増える一人暮らしの老人、60歳以上人口1.67億人のうち約半数は空巢老人）、**留守児童**（留守児童、両親が都市に出稼ぎに行く結果、農村で取り残された子供、5,800万人以上にのぼる）、**留守婦女**といった**三留守**と呼ばれる深刻な社会問題が生じている。

### (3) 就職難、、、～社会的疎外感

近年、**被〇〇**という言い回しが流行し、今は何でも**被時代**だと皮肉気味に言われている（‘被’は一般的に受身を表す）。**被増長**（給料等が上がったことにされている、成長率のかさ上げ等）、**被小康**（そこそこ‘小康’、ゆとりのある生活ができるようになったことにさせられている）等だが、何れも公式の発表、見解は不透明で欺瞞に満ちているとする、社会底辺の公に対する不信感の表れと言える。**被就業**、中国では大卒者の就職難が大きな社会問題になっているが、短期間で大卒者が急増する一方、高学歴者が希望するような職種はそれに見合っただけはお増えていない状況下で、**碩蟻**（高い学位を示す**碩士**と、主として低い学歴と低収入を象徴するとされる**蟻族**の合成語、大学を卒業しても就職できず、集団で蟻のように生活している若者）と呼ばれる新卒大学生の厳しい就職難が生じ、大学が自らの卒業生への需要が大きいことを示すため、学生が知らないうちに偽の就職証明書を作成し、学生は就業したことにさせられているというわけだ。被就業という言葉の背景には、こうした状況下でも動かない公表失業率統計に対する強い疑念もある。中国人力資源社会保障部が公表している**城鎮登記失業率**には、都市戸籍を有している者のみが対象となっていること、**下岗**（なお国有企業の従業員ではあるが、実態上仕事がない状態になっている者）が失業者には含まれていないこと、失業登記を少なくするための操作が広く行われていること（例えば地方政府の中には、登記にあたっての条件・指標を細かく設定し登記を抑制している）等の問題があり、過去10年間一貫して4.0-4.3%の範囲内で推移し、政府が毎年掲げる失業率目標値「4.5-4.7%以内」を必ず達成している。リーマン・ショック後に景気が落ち込んだ2009年第2四半期でも4.3%までしか上昇しておらず、その後も2010年第3四半期から連続12四半期、2013年第2四半期まで4.1%と全く変動しなかった。

**被〇〇**の対象になっている人々は、基本的には、なんらの発言権、決定権も持たない社会的弱者で、必要な保護を受けられないどころか、社会的に一方的な強迫、しわ寄せを受けている人々だとの意識があり、その行き場のない不満がこうした表現を生み出している。**就業難**は、**看病難**（医者になかなか見てもらえない）、**上学難**（学校に行けない）と並んで、人々の社会

保障等公共サービスへの不満を象徴する**老三難**（‘老’は昔からあるの意）のひとつと呼ばれている。最近これらに加え、**養老難**、**入托難**（子供を託児所に入れられない）、**出行難**（交通渋滞緩和や環境対策から、車両番号等様々な形で車の運転に対する規制が行われている）の**新三難**が加わったため、老がつけられるようになった。

大卒就職難が叫ばれる中で、上記**碩蟻**と並んで、大学生の**就業熱詞**（就職に関する流行語）として、**裸辞**、**閃辞**、**跳早族**（いずれも、後先を考えずに会社をすぐに辞め、あるいは短期間にあちこちの職場を転々とすること）、**拒昇族**（昇進を拒否する）といった用語がよく使われる。離職・転職の要因としては、給料・待遇が不満、仕事の内容が自分の専門と合っていない、期待との落差が大きい、仕事に将来性を見出せない、**被忽悠**（だまされた）等、昇進拒否については、仕事よりプライベートな生活を優先、残業や責任が重くなることを嫌う等の理由があると言われており、これらは何れも、**80 後**、**90 後**の意識の変化を象徴するものかもしれない。

**忽悠**は、人気映画「非诚勿扰 2」を契機に、2011 年頃から様々な場面で使用されている。元来「物理的あるいは心理的にゆらゆらする不安定な状態」を意味する中国東北部の方言だが、「人を騙す、詐欺」といった意味で若い世代で使われ始めた。必ずしも深刻ではない軽いニュアンスがある。メディアの影響によって、言葉のニュアンスが大きく変わっていく典型だろう。百度百科は、この単語について興味深い分析を行っている。曰く「忽悠があることによって、中国では、文化面で大きく発展することができ、政治面では意見の差異が生じず、政策は満場一致で決まり、社会の安定的発展、生活の質の向上、和諧社会の建設が保証されている」。もちろんこれは一面を表すが、多分に反語的説明でもあろう。実際、百科では「文化は空前の発展を遂げているが、大部分は水泡にすぎない」「政治面ではひとつの声があるだけで統一されすぎており、政府が一般庶民全体に配慮するに至っていない」「社会は和諧すぎる（‘**和谐社会**’は胡政権時代のスローガン）」「新聞やネットに氾濫する情報は、何が正しく何が嘘かわからない、あるいは全部嘘かもしれない」とも指摘している。**唉呀妈呀、又被忽悠了！**（ああ、また騙された）と中国の庶民が言う時、それはどういった場面で、またどういった感情を抱いているのか？一時流行した**神馬都是浮雲**も同様だ。神馬は発音が似ている**什么**（なんでもすべて）を意味し、すべてのことは実態がなく浮雲のようなもので、深刻に考える必要はないというニュアンスになろうか。

#### (4) ‘優等生’が国家主席に宛てた手紙

香港在住のあるインテリ層は、33 年に及ぶ改革開放、市場経済深化の過程で、中国社会は、それ以前の文革時代に代表される個人崇拜による人々の個としての主体の喪失から、**向錢看**（拝金主義、同じ発音の**向前看**、‘前向き’をもじったもの）、人間関係の商品化・物質化による個の喪失へと**異化**しているとする。近年、ネット上でやはり若い世代がよく使う**打醬油**、元来は、容器を携えて醬油を買いに行く中国の古い習慣から来ているが、今は「自分は（醬油を買いに）路を通りがかっただけで、（そのもめ事とは）関係ない、何も知らない」、「政治やその他敏感な事は話題にしない」との意味として多用される。ネット上でこれらの表現が流行す

る背景には、高成長を続けてきた影の部分で、人々の閉塞感・疎外感が高まっていることがあるのかもしれない。

近年、中国の雑誌やネット上で、不断に書き加えられている一連の文章がある。「メインランドの**高材生**（優等生）が国家主席と総理に宛てた手紙」という体裁をとっており、体裁自体が皮肉を利かせたものになっている。人々の意識や価値観の変化、拝金主義、情報化等々が進む現代中国経済社会を、人々がどのように感じているかの一端をなかなかよく表しているが、その根底には、世界第二位の経済大国になった中国にとって、真の意味での豊かさとは何かという問いかけがあるように思われる。以下、関連する他の表現も合わせて、その一部を紹介しておこう（カッコ内筆者注釈）。

政府統計によると、改革開放 30 年の間、**昇値**（価値が上昇）したものは、**住房**（住宅）、**墓地**、**烏紗帽**（役人がよくかぶっている帽子で官位を意味する）、**月餅と二奶**（愛人）、**貶値**（価値が低下）したものは、**職稱**（職業上の専門知識・技術水準）、**文憑**（大学卒業証書、大卒の就職難）、**道徳**、**誠信**、そして**人民幣**（対外的には為替レートは上昇しているが、国内的にはインフレで貨幣価値が下がっているという趣旨か）。

中国は今や、**月光族**（一晩で稼いだ金を全部使うという消費スタイルの新しい世代）、**啃老族**（親のすねかじり）、**打工族**（改革開放以降に現れた、組織に属さず、自らのスキルで、地域や職場を渡り歩く者）、**蝸居族**（かたつむりの家、かつて日本で言われた‘ウサギ小屋’）、**蟻族**（大卒で就職できず、狭い住居で集団生活）、**牢騷族**（不平不満ばかり並べ立てている者）、**抱怨族**、**行騙族**（詐欺）、**遂利族**（利益のみ追求）、**隱婚族**から成る多民族国家である。

この 1 年は、**給力**（すばらしい）、**杯具**（‘悲劇’と同じ発音で、‘最悪’の意）、そして**糾結**（やりきれない、何れもネット上で若者が多用する流行語）の 1 年。

**教育**：希望進去（去っていく）、絶望出来（やってくる）

**房産**（住宅）：蝸居進去、房奴（住宅の奴隷）出来

**官場**（政治家・役人）：**海瑞進去**、**和珅出来**（‘海瑞’は明代中期の清廉潔白で有名な政治家、‘和珅’は清朝乾隆帝の時代に、専横の限りを尽くし、収賄で巨万の富を築いたとされる政治家）

**大学**：**校花進去**、**殘花出来**（‘校花’は‘キャンパス美人’）

**股市**（株式市場）：**楊百万進去**、**楊白勞出来**（‘楊百万’は、中国で第一股民、すなわちカリスマ投資家として知られる人物、‘楊白勞’は、古い中国からの解放を象徴する新中国草創期の映画、‘白毛女’の中の悲劇の登場人物）

**総結**（まとめると）：**求生不得、求死不能**（‘不得’、‘不能’は‘できない’の意、生きたくても生きられず、死にたくても死に切れない）

**两会**（毎年開かれる全人代と政治協商会議）に出席する各界代表に、两会とは**啥**（なんぞや）と聞くと（以下で、‘会’は、两会の‘会’と、‘できる’の意味をかけていると思われる）、

**農民代表**：**会養猪、会交配**（‘猪’は‘ブタ’）

**工人代表**：**会挣钱、会消費**（‘挣钱’は‘こつこつ働いて金を稼ぐ’）

**農民工代表**：**会討薪、会下跪**（‘討薪’は、‘未払いの給料の支払いを請求する’、‘下跪’は‘ひざまずく’、すなわち権力者、雇い主への服従を表す）

**商人代表**：**会賺錢、会逃税**（‘賺錢’は‘挣钱’と異なり、‘うまく金儲けする’というニュアンスになる）

**股民**（株投資をしている者）**代表**：**会割肉、会流淚**（‘割肉’は株投資での‘損切り’、株価低迷下での零細投資家の悲哀を表す）

**官員代表**：**会撒謊、会受賄**（‘撒謊’は‘嘘八百を並べ立てる’）、、、、

**電視**（テレビ）と**電腦**（パソコン、ネット空間）の違いは？

電視は、**社会和谐**（‘調和’、胡前主席のスローガンが和谐社会の構築だった）、**人民幸福**、**天下太平**、**国泰民安**、百年何事も起こらない平和な状態を表す一方、電腦は、**社会黑暗**、**官員腐敗**、**惡勢力横行**、**民不聊生**（人々が安心して暮らせない）、今にも社会が滅びそうな様相を表す。（その意味で）電視は**婚紗照**（表面的な美しさだけを撮った婚礼写真）、電腦は**生活照**（表面の裏にある現実を撮った生活写真）

現代は**微時代**（‘微’は極小）、**微博**（ブログ）、**微信**（非常に短い手紙）、**微电影**（マイクロフィルム）、**微新聞**（ミニ・ニュース）等々。**微〇〇**が、現代社会の人々の生活様式、思考方法を特徴付ける。人々は微博上で、140字以内の字数制限で自らを表現する**140時代**。一見目立たない**微**が社会に大きな影響を与える。

偉大なる中華人民共和国では（以下、‘不起’は‘できない’の意）、

**油・加不起**（‘加油’は‘がんばる’）、**路・走不起**（交通渋滞）、**学・上不起**（‘上学’は‘学校で学ぶ’）、**病・看不起**（‘看病’は‘医者に見てもらおう’）、**房・買不起**（‘房’は‘住宅’）、**墓・死不起**（墓地不足）、**菜・吃不起**（食品安全問題、‘吃菜’は‘食べること’）、**債・還不起**、**官・惹不起**（逆らえない）、**婚・結不起**（男女比率のアンバランス、家がないと男性は結婚できない）、、、、。